

(1) (2) (3)

七本塔婆



(4)

埼玉・八幡前・若宮遺跡  
はちまんまえ わかみや

1 所在地 埼玉県川越市市場

2 調査期間 第一次調査 一九九三年(平5)一〇月～二月

3 発掘機関 川越市遺跡調査会

4 調査担当者 田中 信

5 遺跡の種類 集落跡・駅家跡か

6 遺跡の年代 八世紀～一〇世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

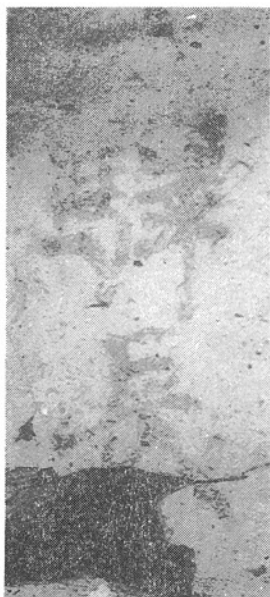
八幡前・若宮遺跡は、川越市街地から西方四km、入間川左岸の入間台地南東斜面に所在する。



(川越)

今回の調査は共同住宅建設に伴う発掘調査で、調査面積は九五一㎡と限られた範囲であったが、遺跡の性格をよく示す遺構や遺物の発見により、貴重な資料を得ることができた。

発見された遺構は、八世紀から九世紀の土坑群が主



墨書土器「驛長」(部分)

体となる。その性格ははっきりしないが、土を採掘したような形状を呈する。井戸は、平安時代一基、中世一基、近現代三基の計五基が見つかった。堅穴住居は、八世紀のものが一棟、九世紀のものが一棟ある。掘立柱建物は時期不明だが一棟見つかった。奈良時代から平安時代にかけての遺構である土坑群と井戸・堅穴住居などはそれぞれ重複することなく占地している。

遺物の出土量は多く、整理用コンテナで約六〇箱ほどである。その多くは土坑群からの出土で、須恵器杯、土師器杯を主体に、須恵器蓋・甕・壺、円面硯、佐波理模倣杯などがあり、土師器甕がほとんど出土しないのを特徴とする。

遺跡の性格を示す遺物としては、土坑群から出土した「驛長」と墨書された八世紀前半の土師器杯がある。また、同時期の遺物として、硯面の径が約一八cmある円面硯が二個体分出土した。墨書土器は、平安時代の土坑や井戸からも多く出土しており、その文字には

「水」「平」「入卅」などがある。

このように、本遺跡の八世紀～一〇世紀にかけての遺物には、官衙的な性格のものが含まれている。最近の歴史地理学や考古学の成果によれば、本遺跡の周辺を武蔵東山道が通っていたらしいことが想定されている。鹿牧令の規定に従って駅家が均等に置かれていたとすれば、本遺跡は武蔵国府跡からちょうど三つ目の駅家の距離にあり、今回の「驛長」の墨書土器の出土により、本遺跡近くに駅家があった可能性が生まれてきたと言える。

木簡が出土したのは平安時代の井戸で、木製皿六点、小曲物二点、水溜用曲物二点、檜扇片一点などが伴出した。この井戸は、遺構確認面での径が約七mもある大型のもので、上部はすり鉢状を呈して壁面に沿ってスロープをつけている。下部は、中央に水溜用に曲物を据え、幅四〇cm、長さ一mの板を井桁状に組んで井戸側を立ち上げている。完全な形の水溜用の曲物の下から、破損した曲物が見つかっていることから、井戸は最低一回改修がなされたことがわかる。また、新古の水溜の間から出土した遺物と新しい水溜より上で出土した遺物の間には半世紀ほどの時期差があるにもかかわらず、両方に「水」の墨書土器があることが注目される。

木簡は、新しい水溜より上層で出土していることから、井戸の廃棄時に投棄されたもので、時期は共伴資料から九世紀末から一〇世紀初頭と考えられる。

## 8 木簡の釈文・内容

(1)



本来横材の大型木簡の一部と考えられるが、上下が原型を保つかどうかは不明である。左右は転用あるいは廃棄のために木目に沿って割裁されている。

木簡の内容は、稲などの出納帳簿的なものと考えられる。このような性格の木簡の発見は官衙との関連を示唆する。本遺跡近くに駅家があったとすれば、木簡の時期は宝亀二年(七七二)に武蔵国が東山道から東海道に移管された後に属するから、武蔵東山道の駅家やその路線の役割がどう変わっていったかを知る上で貴重な手がかりを与えてくれるものと思われる。

なお、木簡の釈文及び性格については、東洋大学の鬼頭清明氏のご教示を得た。

(田中 信)



## 滋賀・大宮遺跡

おおみや

- 1 所在地 滋賀県守山市欲賀町
- 2 調査期間 一九八九年(平一)五月～二月
- 3 発掘機関 財滋賀県文化財保護協会
- 4 調査担当者 仲川 靖
- 5 遺跡の種類 旧河道
- 6 遺跡の年代 七世紀～一五世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大宮遺跡は、守山市の西南部に位置し、南は草津市と境を接している。琵琶湖岸までは約2kmあり、遺跡周辺の標高は九〇m前後である。遺跡の南には、旧栗



(京都東北部)

太郡と旧野洲郡の境界であった境川があり、これより北に守山川・山賀川などの小河川が流れる。いずれも伏流水から発する河川で、これらは、鈴鹿山地の御在所山付近に源を発する野洲川の支流とみられている。